

山口 智弘

灼々たる陽光を思わせる一面の橙赤色に包まれて、三名の少年少女が互いに腕を組み、こちらに向かって微笑んでいる。その姿は何とも眩い。左右は男女で中国服の出立、手に握られた新五色旗が空高く棚引いている。一方、中央の男児は洒脱なセーラー服、年は両脇の児子と同じくらいであろうか、ただ、日章旗を握るその左手はやや力強く、また、左手はポケットに無造作に突っ込まれ、胸を張つてているように見える。何とも自信に満ち溢れた風体である。いま一度、両脇の男女に目を転じてみると、心微しか中央の男児の肩に頃垂れ、彼に身を寄せているように見えなくもない。

キリ・パラモアは、本書（いま仮に『日本の儒教』と訳しておく）において、儒教が日本で果たした社会的役割（いわゆるsocietyと同等の結構が近代以前の日本に存在したか否かについてはさて置く）の通史叙述に挑んでいる。その表紙を飾つたのが、右のような満州国のプロパガンダポスターである。有史以来、様々な恩恵を日本にもたらした儒教ではあるが、近代においては満州国への翼賛という一幕もまた事実としてあつた、と言うのである（本書p.2）。

本学術雑誌を毎号手にする方々の中には、著者と面識のある方も少なからず居られようが、そうではない方のために、ここで若干の紹介を加えておきたい。パラモア氏はオーストラリア出身、専門は歴史学・東アジア研究である。日本での長期留学経験を有する氏は、かつて東京大学大学院に在籍、日本思想史研究の手解きをそこで受けた。二〇〇五年、論文「政治

支配と排耶論 德川前期における「耶穌教」批判言説の政治的機能」により、同大学大学院にて博士号を取得、現在はライデン大学（オランダ）で教鞭を取っている。なお、一松學舎大学が1101五年に採択された私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の「知」の形成と漢学」（現在継続中）には、東アジア研究班の一員として名を連ねている。かような略歴をいいで書いたのは、何も著者の紹介ばかりが目的ではない。氏自身も述べてゐるよう、本書に見られる関心と手法は、右の学問研鑽の場での諸人との交流に強い影響を受けたものであり、これを予め押えてしまふとは、その内容をより深く理解する上で大変有効だからである。

さて、既に此書の内容に幾分か踏み込んでいるが、その目次をいいで一瞥しておこう。

## Introduction

- 1 Confucianism as cultural capital (mid-first millennium CE-late sixteenth century CE)
- 2 Confucianism as religion (1580s-1720s)
- 3 Confucianism as public sphere (1720s-1868)
- 4 Confucianism as knowledge (1400s-1800s)
- 5 Confucianism as liberalism (1850s-1890s)
- 6 Confucianism as fascism (1868-1945)
- 7 Confucianism as taboo (1945-2015)

## Epilogue: China and Japan: East Asian modernities and Confucian revivals compared

古代から現代まで、叙述は順を追つて展開していく。第一章では古代と中世を、第二章から第四章までは近世を、そして、

第五章から第七章までが近現代を扱っている。対象となる時代は至って明確である。

次に、各章の概要を纏めておこう。本書には、著者自身による優れたOutlineが既に付されている（本書pp.12-15）。このため、多くの書評に見られる各章要旨の整理は不要とも考えたが、本書が英文で綴られていること、本邦の書肆で気軽に手に取ることができないこと、此文がネット書店のいわゆる「試し読み」機能によって閲覧できないこと、これらの事情に鑑み、和文による各章要旨を載せることに一定の意義があると考え直すに至ったからである。無論、パラモア氏によるOutlineは大いに参考として頂いた。

「一 文化の中心としての儒教」では、中世までの日本で儒教が果たした役割を論じている。律令国家形成期において、儒教の影響は王朝内部に概ね留まり、また、政治体制へのその影響は大陸・半島と比べた場合に限定的であった。それゆえ、律令制の衰退と共に、その影響力は一時的に退縮した、と説く。また、中世に儒教を担った禪僧（五山僧）の社会的かつ文化的な寄与により、次代の近世に儒教が日本に広く影響を及ぼす素地が形成された、と述べている。

「二 宗教としての儒教」では、近世における儒教の展開について、十七世紀に活躍した林羅山・熊沢蕃山・山崎闇齋・荻生徂徠などによる儒教の実践を巡る言説を追つて叙述する。各人の儒説に差異はあるにせよ、当初学習した朱子学の世界観を、日本社会の実情に応じて実践可能なものへと変容したという点で、これらは通じており、宋明理学への批判に満ちた徂徠学もまた、近世日本の社会事情への応答であった、と述べている。

「三 公共圏としての儒教」では、近世における儒教の文化・政治への浸潤を、儒教を媒介とした公共圏の形成に注目して論じている。泰平の実感が諸人に生まれた十七世紀後半以降、戯芸としての学問が武士のみならず庶民の間に起こる。これから、伊藤仁斎の古義学や懐徳堂の儒学が生まれた。この他、近世中頃に一世を風靡した徂徠の古文辞学は、詩文制作を共にする文壇の形成を促し、また、経書会読の場としての学校・塾が徐々に生まれていく。これらによつて、儒教を介する公共圏の形成が進んだと述べている。また、大塩平八郎の乱の後に諸国で見られる反乱は、儒教を介したネットワークの産

物であつた、と捉えている。

「四 学識としての儒教」では、徳川日本における諸学（西学を含む）と儒教の関係を、自然科学と教育機関を焦点として論じている。近世前期において、医術は当時の多くの儒者によつて兼業され、ここに医術・儒教の知識の融合が確認できる、と説く。近世後期になると、儒学は天文学を始めとする西洋科学の受け皿として機能し、また、寛政異学の禁の後に、朱子学は藩校教学として陸続と採用され、それは諸士の素養となつていった。これらが明治日本の近代化の思想的土壤となつた、と述べている。

「五 リベラリズムとしての儒教」では、主に明治日本の思想家を対象とする。日本におけるリベラリズムの展開期に、西洋近代の政治思想とその制度が儒教を介して如何に理解されたのかを考察している。維新期の啓蒙思想家について、近世日本儒教が構築した世界観からの影響が多く見られ、その特色によつて西洋政治思想は読み替えられ、彼らはそれを自家薬籠中の物へと馴致した。そして、十九世紀末から二十世紀初頭の日本の資本主義思想及び社会主義思想にもまた、儒教からの影響が見られることを指摘されている。その一方で、儒教の制度と実践のそのものは姿を消していった、と論じている。

「六 ファシズムとしての儒教」では、十九世紀末から二十世紀前半までの儒教の役割を論じている。明治期の欧化によつて、一度は公的機関から姿を消した儒教は、日本の対外膨張に伴つて再びクローズアップされる。第一次大戦による西洋の動搖により、斯文会を始めとする儒教関連協会が設立、一九三〇年代の中国大陸侵略に際しては、諸協会はそれを儒教的王道の実践として捉え、他の宗教団体と共に帝国主義への賛意を示していく。やがて、彼らは満州国を儒教の理想の具現として支持した、と説いている。これは本書評の冒頭で触れた通りである。また、この論理は、満州事変後の華北侵略においても援用された。なお、第二次大戦後、儒教は旧植民地と占領地の政治に影響を残す一方、日本においては、それはファシズムに加担したものとして忘却されていった、と述べている。

「七 禁忌としての儒教」では、敗戦によつて日本社会の表層から姿を消した儒教の行方を追跡している。戦後日本の儒

教は二つの水脈へと分岐し、それらは伏流として在り続けた。一つは保守系と呼ばれる知識人・政治家である。政界関係者は安岡正篤との関係を通じて儒教の影響を受け、三島由紀夫もまた安岡の影響によって「革命思想としての陽明学」を説くに至っている。もう一つは、儒教を研究対象として扱う日本思想史学者である。津田左右吉・丸山真男による近世日本思想研究では、儒教研究を媒介とした全体主義の考察が行われる。また、以降の諸学者による儒教探究は、アカデミズムの閉じた空間の中で専ら進められ、社会とは一線を画する形で進められた、と説いている。

そして「エピローグ」では、本論で叙述された日本儒教史の展開を踏まえながら、日中双方の近現代において儒教が果たした役割を対比的に纏めて、筆を擱いている。

以上からも察せられるように、本書は日本語を母語としない欧米の日本思想史初学者を念頭に置いて書かれた概説書である。儒教と日本社会との関係に不案内な方は、IntroductionからEpilogueまで、順を追つて本書を丁寧に読むならば、古代から現代に至るまでのその見取り図が、脳裏に鮮明に描かれるであろう。その論述は至つて平易、かつ、明晰であるからである。

もちろん、日本儒教に一定の見識を既にお持ちの方も、同様に読まれても構はないが、後半の三章、特に、第六章から読み始めるのが一興かもしない。著者は近世日本儒学を長年の研究の持ち場としてきたが、近世以降の日本儒教史に関する展望をここに垣間見ることができて、面白いからである。実際、本書第六章での筆致は滑らかである。井上哲次郎の日本儒教研究から斯文会設立を経て、満州国への賛同までの近代日本儒教に関する論述の展開は、実にスリリングである。この他、明治後期の社会主義思想家の中に、儒教の影響が見られるという記述にもまた、通史におけるパラモア氏の個性が光っている。素養としての儒教が消えゆく中で生を享け、儒教が脱ぎ捨てられていった時期を生きた思想家に対して、趣向ある位置付けがなされている。この点については、研究が十分に進んでいない領域であるため、もう少し丁寧な考察が欲しい所ではあつたが、概説書ということを斟酌すれば致し方なく、これを埋めることが日本儒学を研究する我々の共通課題である

と考えたい。

また、戦後日本における儒教の展開を追跡する際に、思想史研究者を取り上げるということは、日本における思想史・儒教史研究では稀であり、実に興味深いものがあった。日本留学中、列挙されている研究者（本書 p.170）の中の幾人かとの間に頻繁な交流があつたことであろうことは、評者の想像に難くない。それを踏まえた上で、儒教が今日のアカデミズムの場で静かに流れている、と説いているからである。もし、機会があるならば、著者本人にこの点を立ち入つて伺つてみたい所である。本書冒頭で述べられているように、この通史叙述では、儒教が過去の遺構としてではなく、今も東アジアの政治に脈打つものとして捉えられている。今の日本において、儒教に最も近しい距離にあるのは、儒教研究者であろう。研究への従事と教義へのコミットは別物、評者自身は長らくそのように考えていたが、儒教の研究と自らの生に随伴する問題とが如何に関わるのか、現在までの通史を叙述する本書の通読は、このことを一度立ち止まって考える契機となつた。

このように、各論に凝らされた趣向を見つけることは可能で、事情を知る者にとって、それらは確かに面白い。だが、本書は日本の儒学者の教説を掘り下げて探究することを目的として書かれたものではなく、全体として、概説書ゆえの淡泊さがどうしてもある。このため、日本思想史を、あるいは、日本漢学を専攻し、既にそれなりの見識をお持ちの方であれば、読後に物足りなさを覚えるかもしれない。だが、評者が思うに、本書のもう一つの重要な意義がここにはある。

近年、日本の大学においても、日本思想関連科目の英語での講義・演習を求められることが増えてきた。その背景にある役所と大学の事情はさて置くとしても、日本の思想文化に興味を持つ留学生に、その大いなる魅力を伝えるための重要な機会であることは間違いない。その際に、外国語で書かれた適切な水準の概説書に困る、という類の話を屢々耳にすることがある。海外で流布する日本儒教概説書に評者は通じていないため、それらの質をいま一々論断することはできないが、本書については、概説書でありながらも当今の日本思想史研究への目配せに余念がなく、研究水準に十分に耐え得る内容を備えている、という印象を読後に受けた。もし、参考文献を問われる機会があるならば、評者は安心して本書を挙げるであろ

う。

そして、日本儒教に関心を寄せる留学生と共に読むならば、先行研究に慣らされた我々の予想もせぬ反応が多く出てくるのであるまい。そこで議論を通じて、新たな研究課題が発見されることであろう。此書の会読経験を通じて、日本儒教の世界が更に開かれていくのである。そのとき、先の物足りなさは消え失せて、行間からは滋味が溢れるであろう。本書はそういう可能性を秘めているように思われてならない。多くの留学生と共に読んでみたくなる本なのである。

こうしたことば、日本の若い学生にも当てはまるのかもしれない。特に、日本文学・日本史学など、関連領域を専攻する学生・院生に、ぜひ一読を薦めたい。バラモア氏の語りには街いがなく、儒教と日本社会との関係を学ぶための格好の一書であり、各自の学問に間違いなく奥行きが生まれることが併せて期待できるからである。この魅力ある書物が、本邦においてより多くの読者を獲得し、彼らの知の涵養に資するためにも、著者の意を十分に汲んだ良き邦訳の登場が待たれてならない。

Kiri Paramore. *Japanese Confucianism : A Cultural History.* Cambridge University Press. Cambridge. 2016. ISBN: 978-1-107-63568-5 (ペーパーバック), 978-1-107-05865-1 (ハードカバー).

